

## 「中越地震から17年 震源地長岡市川口地区を訪ねる」

～「スーパー安田屋」「ぼちぼちたけだ」から学ぶネットワーク～

関矢 秀幸（新潟福祉文化を考える会）

### （川口地区の概要）

新潟県長岡市「川口地区」は、人口約4,500人ほどの農村地帯である。山間部に点在する小集落と、大河信濃川・魚野川沿いに作られた町場で構成されている。積雪が2メートルを超え、時には3メートルに迫る豪雪地帯であるが、新潟の雪国らしい文化を持った地域で、ここは、2004年に発生した中越地震の震源の町（震央地）である。震源の町が、過疎の町、人口減少の時代に見つけた復興の「ものさし」は、自然との暮らし、集落という人のつながりの中で生きていくと言った「きずなに気付き、きずなを築く」「農村社会」が持ち続けてきたものであった。

### （視察①スーパー安田屋の活動）

中越地震ののち、川口地区には切ってもきれないスーパー安田（あんだ）屋がある。特に喜ばれているのが配達サービス。

配達サービスとは「越後川口・越後岩沢」周辺在住のお客様への基本無料の配達サービスである。買出しへの移動手段が限られている地域の高齢者の方や、妊婦さんなどの主婦層の方々に、「安田屋の配達サービスは本当に便利で助かる！」と、大好評なサービスである。

#### ① 安田屋の人気

・精肉コーナーや惣菜コーナーで県産ブランド豚「越後もちぶた」を提供し、他の店より、買い求め安い価格で提供している。安田屋では記念日などに贈るギフトセットや生花も充実している。

・安田屋の配達サービスは「越後川口・越後岩沢」周辺在住の顧客に対して、店頭申し込みや電話・FAX注文で、自宅に商品を届ける基本無料の配達サービスである。店へ手ぶらで買出しが出来たり、買出しの移動手段が限られている地域の高齢者の方や、妊婦さんなどの主婦でなかなか外に出られない方々にも大好評なサービスとなっている。

#### ア地域住民の声

・子育てしていると買い物に出られないので、配達サービスは凄く心強いです。

（越後川口在住 30代 主婦）

・冬の雪道は危険ですし、移動手段がない年寄りには重宝しております。助かります。（川井在住 70代 男性）

- ・配達サービスを初めて利用しましたが、どの店員さんの対応も親切でよかったです。（川井在住 50代 主婦）
- ・いつも利用しています！重たい荷物を持ち帰らず手ぶらで帰れるのが最高です！（川井在住 50代 主婦）
- ・店頭や電話で伝えるだけで家まで届けてくれる安田屋を他の人にも教えたいです。（越後川口在住 30代 主婦）

イ、生鮮食品、総菜、野菜、果物も充実しており、我々も店内を回りながら家族へのおみやげもしこたま購入した次第である。これも震災復興への協力。



「安田屋」は越後川口駅前にあります。隣には長岡市役所川口支所があります

### （視察②長岡市社会福祉協議会川口支所）

2020年にも訪問しており、1年ぶりにおじゃました。ここから、倉島氏も合流し、五十嵐理事、渡辺理事、五十嵐勝氏、関矢の5名での研修とした。

本間支所長との近況報告に花をさかせ、川口町を取り巻く状況をご教授いただいた。なにしろ、本間支所長とは、平成7年の韓国福祉文化セミナーに参加し、一緒に玄界灘を渡った盟友である。3泊4日の研修であり、このときから、韓国に拠点ができたので、日本福祉文化学会と名乗るようになったと記憶している。

### (視察③川口きずな館「ぼちぼちたけだ」の活動を学ぶ)

今回の視察のきっかけは、渡辺理事からの情報提供である。地元テレビ局NT21が、前回我々が視察した、安塚区畑野地区とともに、この川口竹田が、放映されることとなった。

集落の全7世帯だけのために発行している小さな情報誌があるとの情報から、長岡市川口中山の「竹田集落」に埼玉県川口市から移り住んできた会社員、砂川祐次郎さん(50)を訪ねた。砂川さんが、手描きで作るフリーペーパーは、創刊から11年で66号を超えた。

情報誌は「ぼちぼちたけだ」。A3判の紙を半分に折り裏表を使う4ページ建て。2010年春の創刊以来、毎年5、6回出してきたという。最新は今年9月発行の第66号。トップ記事は、集落にある「案内看板はずし」キノコ展望台の屋根が壊れていたという報告。隣のページには川口地域のイベント情報、裏は集落の地図をイラストにした塗り絵、おさんぽまっぷだ。

砂川さんが生まれ育った川口市から集落に移ったのは1998年。泉質のいい温泉とおいしいお酒がある移住先を探して集落に来たら、たまたま空き家があった。すぐに両親とともに3人で移住した。とのこと。集落は当時、長岡市と合併する前の旧川口町の「大字(おおあぎ)中山字(あぎ)竹田」。砂川さん家族を加えて13に増えた世帯は徐々に減り、2004年の中越地震後には7世帯になった。

集落には世帯の代表者が集まる常会がある。その総代に砂川さんが就いた07年、中越地震の被災地域の復興活動に従事する地域復興支援員制度が始まった。川口に入った支援員たちと「集落が元気になることをやろう」と相談して始めたのが、遊歩道の整備や集落の案内板作りであった。集落自慢の景色が見える場所などに立てるため、砂川さんが下絵を描き、住民たちが色を塗ったり設置したりした。雪深い冬にはかんじきウオークを企画。準備や作業に住民が集まりわいわいやるのが楽しい。でも、集まりに出てくるのは各世帯から1人だけ。ほかのみんなが「何をやっているのか分からない」という状況は避けたい。そのために思いついたのが情報誌だったという。ネタがたまったら家で酒を飲みながら1人で書く。無理をしないのが続ける秘訣とのこと。里帰りする子供たちにも渡せるように、毎号30部ほどコピーし各世帯に配る。おばあちゃんたちがお礼に缶ビールや採れたての野菜、夕食のお裾分けをくれる。

集落の世帯数はいまも変わらないが、子どもたちは大きくなって街に出て、住民は20人を切った。緩やかに高齢化も進む。でも、みんな元気だ。「7世帯だから可能なこともある。無理せず、ニタニタと笑いながら、これからもみんなで楽しめることを続けたい」と砂川さん。情報誌に書くネタもつきそうにないと砂川さんは語っていた。



砂川祐次郎さん（左）から話を聴く新潟福祉文化を考える会（川口きずな館）

#### （何故川口を選んだか）

お会いして開口一番、「有名じゃない方の川口に住んでいます」と、独自の決まり文句で自己紹介された砂川さんは、不思議なおかしみを感じさせる第一印象であり、おかしな男、この「おかしさ」こそが、砂川さんの魅力そのものであった。埼玉県川口市で生まれ育った砂川さんは、新潟県妙高市に祖父母がいて、山の暮らしには幼いころから馴染みがあった。いずれ地方で暮らそうと考えており、移住先を探す中で竹田集落に出会う。景色の美しさはもとより、大好きな酒もあり、また、温泉に歩いて行けることに惹かれ移住を決めたそうである。両親も竹田を気に入り、ついてくることになり、それを機に、思い切って中古住宅を購入したそうである。

移住後は、関越道越後川口サービスエリア内にあるガソリンスタンドの従業員として生計を立てた。「上司から言われたことだけをするのは、仕事じゃない」を信念に、工夫することを楽しみながら働いた。その姿勢が認められ、いつの間にか責任ある立場になっていたとのこと。移住から6年経った2004年、中越大震災が川口を襲った。震央の川口は被害が大きかったが、親も家も無事で、問題なく暮らすことができたそうである。震災後のガソリン給油についても、地元住民や、遠方からの被災者に便宜を図り、感謝されたと語っていた。震災の傷がまだまだ癒えないその年の冬は、豪雪に見舞われ、雪の重みで空き家の屋根が落ちた、雪掘り中にけが

人が出たなどのニュースが流れる中でも、砂川さんの家は無事に冬を越した。「震災にも豪雪にもこの家は負けなかった。これはもう、家が『ここで暮らせ』と言っているとしか思えなかった。」と当時のことを振り返り、竹田ですっと暮らそうと覚悟ができたそうである。

### （竹田元気づくり会議）

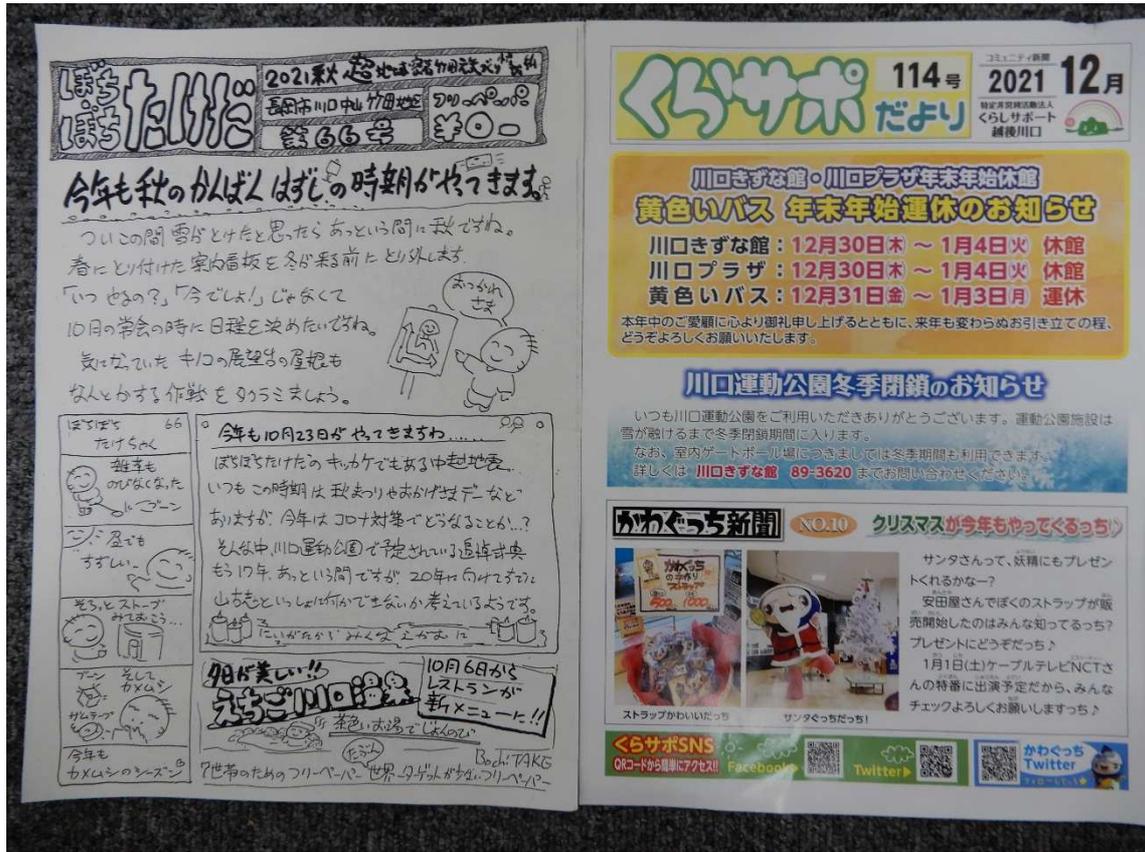
震災から3年後、ガソリンスタンドの運営会社がサービスエリアから撤退を決めると、これもタイミングかと思ひ、砂川さんは一度リセットし生き方や働き方を見つめなおすことにしたとのこと。ここから、砂川さんの新しい働き方の模索が始まった。砂川さんを知るための大切なキーワード、それは復興支援活動に対する砂川さんの姿勢から伝わる「川口への愛」である。砂川さんの応援は、震災復興のために設立された新潟県中越大震災復興基金がきっかけになった。その冬の3ヶ月をかけて集落の人たちと地域の将来像についての話し合いの場を作った。「竹田元気づくり会議」と名付けられたその活動は、現在も続く「かんじきウォーク」などの雪を楽しむイベントを生み出していったそうである。

その後の砂川さんは、竹田の震災復興活動を続けながら、前述した、情報紙やパンフレットの挿絵を描くイラストレーターの仕事、地域づくりに関する仕事で生活を成り立たせている。冬には雪掘りボランティアの受け入れに協力し、参加者の宿泊場所として自宅を提供することもあり、地域の人たちとの交流も行っているそうである。

### （ぼちぼちたけだのこれから）

砂川さんは、川口が好きで好きでたまらないという気持ち、そして、自分の住んでいる川口を良くしていきたい、交流人口も増やしたい。そのためにはまず知ってもらわないといけないと、「ぼちぼちたけだ」も要所要所で配り歩いたり、イベントチラシも配布したり、SNSで情報発信したりしているとのことであった、砂川さんは、まず「自分がやりたいこと＝大好きな川口を元気にすること」を始めてみて、その先に生活が成り立てば良いと考えている。楽しいこと、やりたいことが、回り回っていつの間にか仕事になっている、収入につながっていることが多く、心のままに動いていると、思いがけない仕事の依頼を受けることもあるという。好きなことを仕事にする人は世の中に大勢いるが、好きなことをしていたら、自然と仕事が生まれるという考えを実践する、という砂川さんのような存在はなかなか稀ではないかと思う。もちろん、この働き方や生活を可能にしているのは、川口の住民同士で助け合うきずながあるからと思われる。私は砂川さんの話を聴いて、私が若かりし頃社会福祉協議会活動の座右の銘とした「飲みにケーション、コミュニケーション」「ネットワーク、フットワーク」を思い出した。砂川さんは行動の中にユーモアも忘れないのが、砂川さんが周りの人に感じさせる「おかしみ」「あったかみ」であり、彼の最大の魅力なのである。

我々も震災でつながった縁（えにし）、新潟福祉文化を考える会のネットワークがまた一つ増えた。



「ぼちぼちたけだ」（左） 砂川さんか副理事長を務めるNPO法人くらしサポート越後川口が発行している「くらサポだより」（右）

（写真：新潟福祉文化を考える会専属写真家 渡邊 豊）